

# 井之頭公園の生物(五)

## 新興理科研究会

愈々待望の休暇が来た。共一一致、物資節約、心身鍛錬の夏休み、銚後を固く守る夏休みだ。早起もしよう、心身を剛健にしよう、動植物採集の採集もしよう、いろいろと豫定も出来てゐるだらう。本會も七月二十四日早朝早起會と採集會を兼ね井之頭の早起會に出る様乗車した。天気は暑からず曇天で探集には少し不向である。兒童も今日は五人だけだ。人数は少くも充實して行かうと心に決す。

朝の井之頭は静かだ。いつも来るとまよつが舄もふん許りに漕いでゐるのに一艘も出ない。水の面は鏡の様な静かさである。

ふと見ると汀のフト木間にナカマラオニがもがらる。昆虫は餘り早いためか姿も見せぬ。池の中の橋を渡りはじめるとアサガガモが今網をかけてゐる。水面に對して平行にし、朝網をはる蜘蛛は少く蜘蛛の植村先生が説明して居られる確かに他に見かけない。橋の横の電線の間にもやはり水面に平行に

生懸命網をはつてゐる。橋を渡り終ると中の鳥ですくサカサモの威嚇したのをとらへる處々に幼蛛もある。植村先生に尋ねると今成熟してゐるのがサカサモで未成體はコサカサモであるさうだ。彼方此方採集をしたがら又橋を渡り池の端を上る。横の垣根にジョロアグモの幼蛛が前網、本網、後網の三段の網をはつてゐるのみならず、本網は馬蹄形をしてゐる。

平山博物館を過ぎ、横の小道から又南する。こゝ二、三間で荒地がある。そこにかやの葉をまいてエトモアチグモが巢もつてゐる。植村先生は先刻から熱心に採集されてゐる。此の蜘蛛で問題にされてゐることは、この頭木に卷いた葉の中で生れた許りの幼蛛が何を食物として生活してゐるかであるさうだ。僕も兒童と一緒に丁寧に一つ一つを調べて見た。一つにはゐるは雲かたまかふ許り!! 親蜘蛛は不意の闖入者に頭をもたげ敵意を表はし、如何なる侵略者にも食ひつてゐる。

七月二十一日 峠、幼蛛共に健室、ところ七月三十一日 峠、幼蛛共に健室、ところへに脱皮されてゐるのを見る。(第一回脱皮)

八月一日 雌親は仔蛛に食れてゐるらしい仔蛛は雌の背に群りあるも動かぬ。

八月二日 朝雌親は腹部から食ひ入らる。夕方腹部は殆んど食ひつくされ全く死んでゐる。頭胸部と脚が腐壞つてゐる。今二三日もしたら頭胸部も食ひつくされんであらう。

以上により裏書することが出来た。恐ろしい程親不孝な動物も有るものだとつくづく考へた。親の脛をかざる親不孝はきくけれどそれ以上に親の肉も骨も命まで奪ふ親不孝はその極みであらう。大自然の種族保存の本能は如何に殘虐であるか、昆虫のかまきりと共に其の好對となるであらう。然しかうした本能を人間社會の道徳で律してはならぬ。此れを結果より見るならば種族の絶滅を防がんが爲に之を食ひ、新しい發展を遂げることにその世界の道徳であるからである。

この採集を終つて又林の中に入る。こゝでは多數のカブトムシを得た兒童等は嬉々として聲をあげ發見の喜びに躍り上つてゐる。

新據にして午前十一時迄四時間の愉快な採集會を終へた。小熊先生は我々が約東の日を雨天の爲急に變更するの止むなきに到つた爲め本日見せられぬ故の後奉職後へ皆で行く。小熊先生は府下の小学校の爲本日も御授業中であつた。植物の採集品の名をきく。例によつて此等採集品の全部を書とめる。

兒童達の採集品であるから餘り小さい種類はない。

一、植物開花中のもの、カヤツリグサ、アカザ、メヒジバ、スベリヒユ、ムクゲ、エノコグサ、イチゴツナギ、ビシボウカヅラ、キ、ヒナガヤツリ、チゴザサ、ヒメク、ダ、イコソウ、アワモリシヨウマ、ウツボグサ、ヘクリカヅラ、アキノタムラサキ、サザンソウ、オホソノソウ、アツキヨヒグサ、ヒメスズメバ、ハクテウゲ、ミクリ、イタドリ、サソウカキ、ケツチクサ、キノミヅヒキ、ノウゼンカヅラ、ツユクサ、ヤナギバアキノキリンソウ、ヤマユリ、クサケウチクサ、ホウセンコウ、ナヂシロ、タケニグサ。

(其他) ツゲ、ウキクサ、アサモ、エノキの實、アサノ、カネテ、イタヤカネテ、クワ、シヒ、アカイ、ノキシノギ、イヌシダ。

二、昆虫類 シラヒメバチ、アムバチ、

キチン、モンシロテ、ヒカゲテ、ベニシ、クロヒカゲ、キヌタヒカゲ、ゴイシジミ、コシジミ、ルリシジミ、ミヅイロオナガシ、ミ、コシジミ、ミズテフ、イチモンジセ、リ、カシハヒエヒ、クモクモ、スキバホウジヤク、ホシヤク、キアソビトクガ、ホシカミ、コクハガタ、コガネムシアブラハムシ、アヲカネ、コオニヤシ、ウツバカゲロウ、ナギハムシ、ハグロソバ、ナツアカネ、ミ、オヒラハナムダグ、ジヨウカイボシ、ヤシ、キイロソノトウムシ、ウリハムシ、オホムシ、クロヒメゴキ、コヌツキムシ、アリ、アヲカネ、ベニカミ、スヂア

三、蜘蛛 アシナガグモ(朝網をはる)、ナカムラオニグモ、ヤシイロカニグモ、ジョロアグモ、オホヒメグモ、クサガモ、コサカガモ、モズ成體、ハナグモ、サソノミダマシ、エトモアチグモ、ヤニサシガメ、アツチグモ、トウムシ、ウババグモ。

他に三種の異なる種別未詳の故後日之を記すこととする。(伴岡佐太郎)

きかねない様子を示してゐる。試みに指を入れたら忽ちとびかゝり大膽もつて排撃して来た。頭も胸も全體的にのくしく出来てゐる。次には卵とそれを守る雌親次は雄等々次々開いて行く間に親の死骸といふも大膽と脚だけしかないので幼蛛が群がり集つてゐる。次のもく……。此處で前の問題が稍明瞭となつた。即ち此の中にある幼蛛は親の體を食ふのではないか。小蜘蛛を護るためには構憚りとして決死的な闘争心をもつ雌も子供の前にはよき母であり圍ひもなく怕々としてその體を提供するのであらうか。此の慘劇をを昆虫に求むるならば、秋の野山に交尾中の雄がまきりが雌がまきりに其の體の半分を食はれ乍らも信從徒としてゐるが如く、否これより以上に殘虐であるといへば、生き乍らに食へられて少しも痛痒を感じないのか蜘蛛の殺されたのも見當らないが多い。此れを鑑み際に明かにする爲に私は改めて卵と雌親の入つてゐる巢をつもちかへり飼育することにした。其の經過の大略を記述すると

七月二十四日 エトモアチグモの巢を採集し持ち歸る。

七月二十七日 卵は全部孵化した。

七月二十八日 處々共食ひ有り。